

活字との密約

——『貼雑年譜』に見る乱歩の雑誌偏愛——

1 はじめに

江戸川乱歩の生涯には倒錯がつきまといつている。乱歩は鮮やかなトリックで読者を魅了する本格探偵小説を書こうとしたが、代表作の多くは恐怖と狂気が支配する怪奇小説である。緻密な論理で組み立てられた長篇小説に憧れたが、多くの連載小説が挫折した。日本の探偵小説界において最も名の知られた主人公・明智小五郎を世に送り出したが、小説のキャラクターとしてより魅力的なのは怪人二十面相や黒蜥蜴である。斬新なモチーフと着想で数々の名作を残したが、アイディアが枯渇したあとに書いた少年探偵団シリーズの方が爆発的に売れている。つまり、江戸川乱歩の作家生活は、常に歪んだ逆説性に彩られているのである。

思うに任せない作家生活のなかで乱歩が唯一拘泥したのは雑誌と関わり続けることだった。書き上げた原稿を出版社に送り届け、印刷されるのを俟つだけといった文筆家として生きるのではなく、自分たちが理想とする雑誌を自分たちの手で編輯し、それを

継続することだった。一九五七年八月、すでに還暦を過ぎていた乱歩が探偵作家クラブの面々からの要請を受けて雑誌『寶石』の編集長となり、雑誌表紙に「江戸川乱歩編集」の文字まで入れて継続を図ったことに象徴されるように、乱歩にとつての雑誌は表現者としての自分が立つたための矜持であり足場だったのである。

乱歩における雑誌偏愛を考へるうえで、もうひとつ重要なのは、それが頭のなかにある幻影を形にする乗物であると同時に、恋愛対象のようなときめきを与えてくれる存在だったということである。彼は、無機質な金属の塊であるはずの活字が組み合わされて紙に印刷される過程そのものに生命の息吹を感じ、それを見届けられる場所に立ち続けたいと願う作家だったのである。「活字と僕と——年少の読者に贈る——」（『現代』一九三六年一〇月・附録）では、少年時代から続く活字への偏愛、および自分の手で印刷物を作ってみたいと考えはじめたときの気持ち、「異国の夢を運んで来る活字の船の懐しさに、僕は活字そのものを自ら所有し、それに、他人の夢ではなくて、我が夢を托したい気持ちに襲われ始めた」と記している。

石川 巧

また、随筆の後半で乱歩は自分自身を「少年職工」に擬え、印刷器のハンドルを握ったときの興奮を「銀色の活字の上を、一人の少年職工の手によって、インキの色も艶やかなローラーが回転する、別の一人の少年職工が、印刷紙をその上にソツとのせる、すると僕が印刷器のハンドルを握って、紙の上からグツと圧えつけるのである。そして、活字に密着した紙をスーッと剥がして、出来具合を見る時の楽しさ。印刷をすれば紙に文字が現れるのは当り前のことながら、何かそれが不思議な奇跡のように思われて、自分のかいた文章が俄かに光彩を放ち、勿体ない程の名文に見えるのであった」と記している。作家のなかには幼い頃から親しい友人と同人雑誌や回覧雑誌を作っていたという才人が少なからずいるが、乱歩の場合は、活字に付着したインキが紙に付着して鮮やかな文字が現れる瞬間のとときめきをこよなく愛し、印刷に関わるすべての行程を自分で完結させたいと考えている点で極めてフエティッシュである。乱歩にとつて、活字は超自然的な力を宿す呪物に他ならなかったのである。

この随筆の最後は、「このようにして、僕は直接活字そのものと縁結びをした。一生涯活字と離れられない密約を取交わした。そして、それからのちの今日までも、活字の深情が、いかに僕につき纏ったことであろう」という印象深い表現で閉じているが、それは乱歩の生涯を端的に物語る言葉だといえるだろう。

本稿は、こうした認識に基づいて、江戸川乱歩がまだ本名の平井太郎だった時代における雑誌とのつながりを探求するものである。活字との密約を交わした平井太郎がどのような雑誌を作り、そこで得た知識と経験を作家活動に活かしていったのかを明らかに

にするものである。乱歩には自らの生涯を様々な記録や資料で編み直したスクラップブック『貼雑年譜』²⁾があり、それ自体が彼のフエティシズムの集大成となっているため、本稿では『貼雑年譜』第一巻の資料と言説を引用しながら考察する。

2 少年時代―『中央少年』



図 1

『貼雑年譜』には、「少年雑誌ノ発行」という見出しのもと『中央少年』(第二巻第一号)の表紙【図1】と目次が添付されており、「中学三年頃自画自刷ノ少年雑誌(或ハ中学二年ノ頃力)」と記されている。また、乱歩は同誌について「冒険小説「怒涛」ト「悲しき思出」トヲ書イテキル 鉄筆文字ハ全冊私デアル。会則ニハ会費制度ニナツテキルガ実ハ小学校前ノ文具屋ナドニ委託販売ニシテ可ナリ売レタモノデアル」と語っている。中学時代の乱歩は、すでにもの書きを気取り、編集者の仕事もよく知っていたのである。

さらに注目すべきは、乱歩が「非売品」と記されたこの雑誌を文具屋に「委託販売」し、相応の利益を得ていたことである。雑誌は自己満足で作ればよいというものではなく、読者に届けることではじめて意味をもつし、それは一定の対価を得られるものでなければならぬという信念があったからこそ、乱歩はそのような大胆な方法を取ったのであろう。実際にどれほどの部数が出回ったのかはわからないが、敢えて「非売品」と記したうえでそ

れを販売するという戦略には、あまたの文学少年とは違う出版経営者の資質を認めることができる。当時の乱歩は旧制愛知県立第五中学校の生徒だったわけだが、雑誌名に「中央」という言葉を入れ、表紙面に学帽を被って書物を読む学生を描いている点、それを樹木に擬え千羽鶴と組み合わせている点についても明確な意図を感じる。そこには、立身出世あるいは「中央」への志向が如実に表現されている。この表紙の雑誌を「小学校ノ前の文具屋」に並べれば確実に売れるはずだという算段があるからこそ、彼はこうした表紙画を採用したのであろう。

『貼雑年譜』には少年会なる組織の会則も添付されており、目次を見ると、誌面は口画、巻頭冒険小説、画物語り、普通記事、悲哀小説、普通記事、怪談、読者欄で構成されていたことがわかる。会則には「本会は少年の思想改進を目的」「本会には会長一名顧問数名。別及常務委員をおく」といった項目が並んでおり、中学生の遊びとは思えない本格的な体裁になっている。雑誌は「非売品」だが会費として「金参銭」を徴収することが定められ、発行所の住所、電話番号、「不許複製」の警告まで記されている。懸賞作文の募集も行われており、賞品は「面白い御伽噺の書籍等呈します」とある。

乱歩とともに雑誌を作っていた友人・本荘実は、のちに「旧校舎時代備忘録」(『熱田中学創立三十年協賛会紀要』一九三八年一月)のなかで、「或る日、彼の家へ行く」と明倫中学生だつた丹下といふ少年が居合せてゐたが、平井太郎が云ふのに三人で一つ探偵小説を作らうぢやないか、そしてそれを印刷して小学生に売ることがどうであらうかと。それで忽ち賛成して、さつそく三人

合作になる変なものを作り上げ、それにどんなものだつたか写真版まで挿入してゲラ刷のやうなものを作つた。活字を買つて来て印刷したものであつたか、何処かの印刷屋に頼んで刷つてもらつたものであつたか今判断しない」と回顧しているが、それが事実だとすれば、乱歩は中学生の段階ですでに「探偵小説」を書くことに自覚的だつたし、写真版の挿入やゲラ刷りにも拘つていたことになる。こうした知識をどこから仕入れたのかはわからないが、いずれにしても中学時代の乱歩が出版事業を精緻に模倣できる観察者であつたことは間違いない。

3 早稲田大学時代―『白虹』『帝国少年新聞』『奇譚』

こうした偏執的な気質は、早稲田大学入学後さらに増幅していく。一九一二年三月、愛知県立第五中学校を卒業した乱歩は旧制第八高等学校を受験することにしたが、父の破産により進学を諦め、家族で朝鮮に渡る。だが、学業への希望を棄て切れなかつた乱歩は苦学を覚悟で上京し、同年九月、早稲田大学政治経済科予科に中途編入する。叔父の口添えにより、棲み込みとして働きはじめたのは下谷区湯島天神町の活版屋・雲山堂であつた。活字との「密約」を交わした乱歩にとって、それはこのうえない働き口だつたはずだが、実際には南京虫と過労に悩まされ、わずか三ヶ月で活版屋を離れることになる。その後は図書館の貸出係、英語の家庭教師などのアルバイトをしながら糊口をしのぐ。

ただし、この間も乱歩の雑誌発行熱は続いていたようで、活版屋の主人に「子供相手の娯楽雑誌を出して、お金儲けをして、そ

れを学費に当てよう」〔活字と僕と——年少の読者に贈る——前出〕と持ちかけたりもしている。『貼雑年譜』には「コノ頃、私ノ中学校以来ノ雑誌発行熱ハマダサメテキナカツタ。雲山堂活版所デモ主人ニ雑誌発行ヲ勸メテ容レラレナカツタヤウナコトモアルシ、下駄屋ノ二階時代ニモ絶エズソノコトヲ計画シテキタ」と記されている。苦学生だった乱歩は、中学時代の夢ももう一度という気持ち棄てることのできなかつたのだらう。

一九一三年九月、大学部政治経済学科に進級した乱歩は、翌年の春、級友数名とともに廻覧雑誌『白虹』を創刊して幻想小説「夢の神秘」、叙事詩「オルレアンの少女」などを書く。だが、この雑誌は原稿用紙の束を綴じただけの簡便な作りになっており、雑誌と呼べる代物ではなかつた。『廻覧雑誌』『白虹』ノコト」〔貼雑年譜前出〕と題した解説には、『白虹』のことが、「喜久井町ノ家ニキル間ノ思出トシテ、前記ノ少年新聞失敗ニツイデ、コノ肉筆雑誌ノ発行ガアル。級友数名ヲ誘ツテ原稿紙ヲ綴ヂテ厚イ雑誌ヲ出シタ。大正三年二月号カラ一年余リノ間ニ五冊ホド出シタカト思フガ、ソノ内三冊ガ私ノ所ニ残ツテキル。ソレニ寄稿シタ私ノ文章ハ別表ニ記シタ通りデアル。カクノ如ク私ハ何カシラ雑誌ノ編輯、発行トイフヤウナコトヲシナイデハ我慢ガ出来ナカツタノデアル」と記されているだけである。

一方、本科生として経済学を学び始めた乱歩は、やがて真剣に政治家をめざすようになる。それまでのような趣味人気質の文学少年を脱し、政治や経済に対する持論を力強く訴える青年へと変貌する。早稲田大学雄弁会が催した懸賞演説会に登壇して「二個師団増設反対演説」（一九一三年二月六日）という演題で「経

済学カラ見タ非戦論」を展開したりもしている。こうして、乱歩にとつての雑誌は学費を稼ぐための道具でもなければ小説を発表するための媒体でもなく、自らの主義主張を訴えていくためのメディアとして認識されるようになる。

言論の場に身を乗り出すことを決意した乱歩は、出資金二〇円を集めて『帝国少年新聞』を創刊し、喜久井町五番地にあつた祖母の家に帝国少年新聞社の看板を掲げる。『帝国少年新聞 主意書』なる宣伝チラシまで作成し、「現今の新聞紙の欠陥として数ふるものは多々あるべしと雖茲に吾人が謂はんと欲する処は其文章難解にして婦女年少者又は高等の智識を有せざる労働者等の読むに適さざる事なり」『本新聞は其内容の一半を時事問題の解釈及重大事件の報道に充て他の一半は趣味あり実益ある少年小説御伽噺又は科学的の談話等を満載し以て少年をして娯楽の内に日常の出来事を知らしめ知らず識らずの間に国家的感念を深からしめん事を計らんとす』と記している。



図2

また、『帝国少年新聞』を全国に展開していこうと考えた乱歩は、「本社主義を全国に広めたために種々其方法を考へた結果全国の雑誌に興味を有する少年諸君に御相談して支部を作つて戴く事にした貴下も其一人

と認めて別紙の推薦状を呈した訳である支部とは五名以上の読者が一団となつて組織するので推薦状を受け取つた方は御学友等に勤めて支部を設立し自ら支部長となつて頂きたいのである」と訴えて、ネズミ講まがいの働きかけをする。チラシで紹介された内

容【図2】を見ると、主張、通信、学術談話、少年小説「希望」、冒険小説「黄色黒手団」、滑稽小説「仙骨」、お伽噺「不死王国」、その他で構成されており、○普通新聞紙の半分大で四頁／○一頁六段四十行十六字詰総字数一万五千字余の体裁、「毎月三回一日十一日廿一日発行を予定していたことがわかる。もちろん、こうした安直な企画がうまくいくはずはなく、のちに乱歩は『貼雑年譜』に「コレヲ少年雑誌ノ投書家ナドニ送ツテ読者ヲ得ウオイ虫ノヨイ考ヘデアツタ。今カラ考ヘレバ滑稽ノ至リ、少々低能ノ気味スラ感ジラレルガ、二十オトイフ若サノ無分別デアラウ」と記すことになる。

『帝国少年新聞』で苦い経験をした乱歩は、大学生活の後半を図書館で過ごすようになる。早稲田大学の図書館はもとより、当時、東京で洋書や翻訳物が最も充実していた上野図書館、日比谷図書館、そして大橋図書館に通い詰めてポー、ドイル、フリーマンなどの理智的な短篇探偵小説を耽読する。また、政治や経済に関する専門的な知識を蓄えるために、知人を介して憲政会の院外団が出していた『自治新聞』の編輯を手伝うようになる。『貼雑年譜』には、当時のことが「記事ハ勿論、カッツヤ表紙ナドノ絵モ私ガ書イタ。全頁ニ度刷リノ絵表紙ナドモアツタノダガ今紛失シテ、コ、ニ貼リツケルコトガ出来ナイノハ残念デアル。同誌ハ大正四年一月号（第四号）デ資金難ノタメ廢刊ニナツタ」とある。

一方で、乱歩は終刊となる第四号にさ、ふねの筆名で、かつて『白虹』に発表した長詩「オルレアン少女」を再掲載したりもしている。乱歩はかつて『中央少年』でも「笹舟」という号を出すなど「さ、ふね」という言葉への思い入れを持っていたと思われるが、いずれにしても、こうしたセンチメンタリズムの表現に

当時の乱歩の揺れる心境が刻まれていることは確かである。

大学三年生になった乱歩はダーウィンの『進化論』^③と出遭い、クロボトキン『相互扶助論』、マルサス『人口論』などを次々と読破していく。『貼雑年譜』に「私ノ時代ハマルクスノ流行ヨリハ少シ早カツタノデ、最モ影響ヲ受ケタ本ハ何カト云ハバ結局ダーウキンデアツタ。ツマリ育チトシテ自由主義者デアツタワケデアル」と記すほどダーウィンの学説に傾倒し、「競争論」^④というテーマで卒業論文を執筆することになる。のちに早稲田大学教授となる出井盛之、中野登美雄とともに「時局財政経済問題研究会」を起こし、「交戦国の財政」（『早稲田学報』号の記載ナシ）というテーマでの研究調査もしている。著名な学説を理解するだけでなく、理論を実践のなかに取り入れるための活動を行うようになる。また、自分が読んだ探偵小説に関するメモなどを整理して『奇譚』【図3】という手製の書籍を造本する。『貼雑年譜』に記載されている「文反古類目録抄」を見ると、ドイルの「試験騒ぎ」翻訳も手製本と記録されている。当時の乱歩にとって、自分だけの書籍を拵えることはこのうえない悦楽だったのであろう。

図3



ところで、この『奇譚』について乱歩は、「内容は「ミステリ小説覚書」というようなもので、小型の洋野紙にペンで清書し、章をわけ、カッツの絵まで描いて、自分で製本し、表紙の図案も自分で描いた。本の表題は「奇譚」とし、英語でエキストラオーデイナリと説明がついている。頁数は二二八頁、後に大正八年本郷団子坂で三人書房と

いう文芸古書店を自営したとき、十円（今の四、五千円に当る）の正札をつけて棚にかざっておいたが、誰も買手がなかったという代物」（『探偵小説三十年』岩谷書店、一九五四年九月）と詳述している。また『貼雑年譜』にも「私ハ「奇譚」ト題スル探偵小説読書目録ノヤウナ本ヲ手製デ装幀シテ、今モ持ツテキル。探偵小説ハ涙香物ナド子供ノ時カラ読ンデキタガ、ポー、ドイルナドヲ知ツタノハ大学ヘ入ツテカラデ、大学部ニ年生ノ頃カラ外国探偵小説ヲ愛読シタ、ソシテ翻訳モ試ミタシ創作モヤツタ。一方暗号史トイフヤウナモノニモ興味ヲ持チ上野図書館デ調べタコトガアル」という記述がみられる。これらを読む限り、この造本が雑誌編輯の欲望を充たすための代替物として製作されたことは間違いないと思われる。文学を語り合う仲間も見あたらず、ひとり図書館に籠って海外探偵小説を読む日々なかで、乱歩は雑誌に代わるものを編輯したいという止むに已まれぬ思いで『奇譚』を作りあげたのだらう。青年時代の乱歩にとって、雑誌や書籍を編輯するという行為は、自らの幻影を形にするだけでなく孤独や傷心を癒すためのリズム（避難場所）でもあったのである。

こうして、現実逃避のように海外探偵小説の世界にのめりこんでいった乱歩は、やがてアメリカに渡って英語で探偵小説を書くという夢を抱くようになる一方、安定した収入を手に入れるため会社員になるしかないという現実にも直面することになる。一九一六年の日記に探偵小説「火繩銃」の下書きを書きつけたり、冒険探偵小説「悪魔ヶ岩」の草稿を書いてみたりもするが、結局、誰かに読んでもらうほどの自信作にはならず、悶々とした日々を過ごすことになる。のちに乱歩は、『貼雑年譜』の備忘録で自らの学生時代

を振り返り、「私ハ大学時代文学トイフモノヲ全ク知ラナカツタ。雑誌好キノクセニ文学ヲ知ラナイナンテ変デアルガ、ソレガ事実デアル。現代純文学ヲ了解シタノハ大学ヲ出テ一年ホド後デアツタ」と記しているが、それは偽りのない実感だったと思われる。

4 職業流転の時代

―『日和』『グロテスク』『東京パック』『工人』

早稲田大学を卒業した乱歩は、代議士・川崎克の紹介で、同じく代議士の加藤定吉が経営する加藤洋行の大阪支店に就職する。命じられてもいないのに店の庭の掃除をするなどして支配人に可愛がられた乱歩は、毎晩同僚と盛り場に繰り出すようになる。当時の加藤洋行は大連、上海、漢口といった外地にも支店をもち、デパート経営から雑貨卸小売りまで手広い商売をしていたため仕事は順調で収入も多かったのである。また、直接的な言及はなされていないが、こうした経緯からみて大学卒業後の乱歩が政界とのつながりを期待していたことは間違いないと思われる。

だが、年の暮れに思いがけない金額のボーナスを貰って放蕩を覚えた乱歩は、次第に仕事に身が入らなくなっていく。『貼雑年譜』には、その頃のことを「放蕩トイツテモ大シタコトガ出来タワケデハナカツタガ、ソレヲツツケテキル内ニ二段段店ニ居ヅラクナツタ、店ノ金ヲ使ヒコムトイフホドデハナクテモ、何トナク不義理ガフエ、大正六年五月頃、遂ニ私ハ店ヲ出奔シテシマツタ」と記されている。放浪の旅に出た乱歩は、伊豆箱根の温泉宿にこもって再び文学への情熱を取り戻していく。「コノ放浪中ノ温泉宿ノ徒然ニ、私

ハ初メテ谷崎潤一郎ノ小説ヲ読ンダ。ソレガ現代小説トイフモノニ接シ、ソノ意味ヲ了鮮シタ最初デアッタ。好ンデ綜合雑誌ナドノ小説ヲ讀ミダシタノハ、ソレカラ以後ノコトデアル。文学トイフモノニツイテ如何ニオクテデアツタカヲ知ルベシ」(『貼雑年譜』より)。それがこの頃の認識である。

東京に舞い戻つた乱歩は、活動写真会社を訪ねて弁士を志願したり、上野図書館で外国映画に関する書物を読み漁つたりする日々を過ごす。そこで得た知識をもとに映画論を書き始めたりもしている。もちろん、それが収入につながるわけではないため、身の回りのものを売りながら露命をつなぐしかなかったようだが、文学や映画に耽溺する日々を送ることで、乱歩のなかには再び文学で身を立てたいという衝動が募りはじめ。なにもかもがうまくいかない時期だからこそ幻影の世界が輝きはじめる。

大阪で小工場を経営していた父によって大阪へと連れ戻された乱歩は、ここでなぜかタイプライター販売員になっている。文字盤を打鍵することで活字を紙に打ち付け、文字を印字するタイプライターは、まさに乱歩の嗜好にピッタリの器械だったと思われるが、残念ながら営業の仕事は向いておらず、ごく短い期間しか続かなかつたようである。『貼雑年譜』を読むと、この頃の乱歩が、のちに「火星の運河」というタイトルで『新青年』に発表される小説の原型を書いていたことがわかる。

その乱歩に再び雑誌編輯の機会が訪れるのは一九一八年のことである。前年の一月に父の知人を介して鈴木商店鳥羽造船所社員となつていた乱歩は「鳥羽おとぎ倶楽部」なる会を組織し、地域の劇場や小学校でお伽噺を聴かせる活動を始める。一九一八年

には、懇意にしていた伊勢新聞社活版部に印刷を依頼して雑誌『日和』を創刊し、発行兼編輯人として健筆を揮う。『貼雑年譜』には乱歩自身のカットに続き平井太郎「首途」という「編輯者発刊の辞」が添付されており、「若き吾人は、若き造船所に働きつ、鳥羽の一角から世界の一大遺産を見詰めて居る。この雑誌がか、る記念すべき時期に生れたるは、偶然乍ら幸先よき極みではあるまいか。／社会百般の害悪は殆ど凡て人間の頭の悪さより起る。戦争の勝利を国家永遠の利益なりと信ずるもこれ。随つて軍隊の為に莫大の費用を費すもこれ。監獄の常に満員なるもこれ。而して、資本家と労働者の紛争の如きはその最もよき一例である。テエラーは物質的の無駄を省くことを高唱した。我等は誤解と云ふ精神的の無駄を省くことに、より一層努力せねばならぬ。／誤解の弊を避くるには頭をよくせねばならぬことは勿論、更らに、各自の意志を思ふさま発表し合ふことが緊要である。本誌はか、る方面に於て人類平和の一助を為す。／もの云はぬは腹ふくる、業である。物質的自由の極限さる、吾人は、精神的自由を求めて止まぬ。止むに止まれぬ思想の発表を推へて、常に腹ふくる、人は何時かは、腹中のもの腐敗し去るか、力余つて腹を破るかの一に到るべき運命を免れぬ。即ち、思想の発表は、人間に於ける安全弁である。本誌はか、る安全弁の役を務むる」と記されている。

雑誌『日和』に関して、『貼雑年譜』の解説は「日和」ガドウイフ雑誌デアツタカハ、左ノ一文デ想像ガツクト思、コレモ技師長榊本氏が大變熱心デ、私ハ会社ノ仕事ヲシナイデモヨイヤウナコトニナツテキタ」と記している。乱歩が「日和」歌壇に投稿した「ふと見れば蝶の一つ風に舞ふ、ある冬の日の淡き悲しみ」という

短歌や「道楽くらべ（その一）歌道楽」という漫画まで掲載されており、ほぼひとりで全体を切り盛りしていた様子も伝わってくる。

また、「私ノ書イタ編輯者日記」と題された各号の編輯後記も切抜かれており、ときには強い口調で自身の認識を語っている。

たとえば、鳥羽小学校で行われた黒板勝美（東京帝国大学教授）の講演を傍聴した乱歩は、その内容を踏まえつつ、「□事の正否を論ずる場合は出来るだけ理想的なるをよしとし、その理想に到達する方法を講ずる場合には出来る丈實際的なるを利とす。理想論を迂なりとして、苟くも実際に近からぬ議論は之を排斥するはまだ這間の差別を知らぬものと云ふ可し。／民族的割拠は人類の理想に非ず。「血液の前には百千の平和論も効なき」その血液の中心とし理想としては民族の伝説などにて差別あるまじき信仰に差別を認め、不便なる国語の差異を基礎とする所謂民族主義の如きは、僕より云へば寧ろ人類の理想にさからふもの也。僕はコスモポリタン也。／□所謂民族主義は主義に非ず、自然の事実也。或は自然の法則也。世には、人類の性として戦争は避け得られぬ故、平和論は不必要なりと唱ふるものあり。博士の説これに類せずや。／□自然は民族国家を最も喜ぶ、而して我国はその民族国家の理想に叶ふ、故に樂觀すべしでは一寸困る也。人類の理想を建て、その理想実現の方法に関して我国家は如何なる状態にあるかを見て、それから樂觀なり悲觀なりするがよき也。／□自然に執する自然主義は採らず、自然を改造する理想主義こそ願はしけれ。角力の相手の力を減ずることは難しかるべきも、その力を利用して敵を倒すのは出来ないことに非ず」（『日和余録 一九一八年十一月一日』）と論じ、わざわざ「幼稚ナレドモ思想傾向ハ今

モ同ジ タゞ黒板博士ニハ文献学者トシテ昔日ヨリ遙カニ敬意ヲ表スルヤウニハナツテキル」とコメントしている。

さらに、『日和』第二号（一九一八年二月一日）の巻頭にスペンサーの社会進化論に基づく近代文明論「庶雑より統一へ」を発表し、「凡そ物の統一には必ず明瞭なる中心を要する。一貫せる主義を要する。人心の統一も勿論例外ではない。眞の生産に生きんとするものは主義なく中心なき無機的混合を排して、生命ある有機的結合を求めねばならぬ。我等はいやが上にも主義と中心との明瞭ならんことを要求して止まぬ」と主張している。

だが、乱歩はこの二号をもって鳥羽造船所に辞表を提出し、編輯から離れることになる。ここでも生活が落ち着くとそれを放棄して刺戟的な環境を求めてしまう悪癖を發揮する。『貼雑年譜』には「学問ノ夢（鳥羽造船所退社に關聯シテ）」という文章があり、「心ニモナイ職業ニツイテキルト（職業トイフモノハ常ニ私ニトツテハ心ニモナイノデアル）」「一体何ノタメニ生キテキルノカ」トイフ疑問ニ堪ヘラレナクナツテ来ルノデアル。人生トイフモノヲ、心底ニマデツキツメテ考ヘナイデハキラレナクナルノデアル、ソ方法トシテ私ニハ文学ヲ通ジテノ勉強シカナカツタ。即チ学問ノ夢デアル。ソレハ幾度試ミテモ体力、資力共ニ乏シクテ、一度モ夢ヲ果タシタコトハナイノデアルガ、ソレユエニ、夢ハイツマデモ、四十八才ノ今日マデモ、夢トシテ残ツテキルワケデアル」と記されている。若き日の退社理由を書いているうちに、いま四八歳になった自分が顔を覗かせ、忸怩たる思いに至っている乱歩がいる。

一九一九年二月、上京した乱歩は本郷区駒込林町六番地（団子

坂上)に古本屋を開業する。二人の弟と一緒に開業した書店ということで、名前は三人書房とする。店舗に芸術関連の書籍を並べた乱歩は、日本歌劇研究会田谷力三後援団(五月)を立ち上げ、レコード音楽会(八月、九月)などを開催する。資金難により実現はしなかったものの、歌劇雑誌の創刊も企てている。ここで乱歩がめざしたのは、ただの古本屋ではなく、芸術や文化活動を担う人々の交流を促すサロンのような場だったのであろう。

そうしたなか、乱歩のもとに雑誌の編輯を任せたいという依頼が舞い込む。漫画会同人の後援で漫画雑誌『東京パック』を出していた北澤楽天から版權を譲り受け、誌面の刷新を考えていた下田憲一郎が、たまたま知り合いだった乱歩に声をかけてきたのである。『貼雑年譜』にはそのことが「当時ノ漫画界ノ大家達ヲ訪問シテ原稿ヲ貰フコト、編輯ヲスルノガ仕事デアツタガ、私ハ大家ノ絵ノ中へ自分ノ漫画モ入レ、又雑文ソノ他文章ノ部分ハ一手ニ引受ケテ自分カラ書イタ」と記されている。

『東京パック』の編輯を手がけたことよって、三人書房には多くの漫画家たちが出入りするようになる。乱歩は、そのなかのひとつである吉岡鳥平に自分の探偵小説を講談社に世話してくれるように頼んだこともあったという。だが、ここでは乱歩は編輯者としての立場を忘れて雑誌の誌面を私物化してしまう。抜苦子の筆名で「時局バックリ」なる風刺文を掲載するばかりか、勝手に自作の漫画を掲載したり署名記事を書いたりして、プロの漫画家たちの響響を買ってしまうのである。こうして、乱歩はわずか三カ月で編輯の職を解かれることになる。

ところで、この頃の『貼雑年譜』を読むと「私ハマルクスニ興

味ヲ持チハジメ、ソノ付記ヲヨンデキタ」という一節に気づかされる。また、「時局バックリ」に「普通選挙が官僚によつて称へらるゝ御代となれる。移れば変る世の習か。その昔普通運動の下の回りを務め寺内内閣によりて検束せられし、羽織ゴロ共近頃その官僚の使唆によりて普通選挙を唱へ始め居れり。官僚が内閣乗つ取りの下心。こゝにも、物欲し相な政權餓饉共の惨状を見る。イヤハヤと申すべきか」といった挑発的な記事を書いたことで、特高警察から目をつけられたこともあったようである。

『貼雑年譜』には、そのときのこと「要視察人トイフ程デハナイガ、サウイフ目ニアツタノハ生レテハジメテデアツタノデ、私ハ刑事ニ気焰ヲ上ゲナガラ、イサ、カ得意ヲ感ジタノデアル」と記されているが、マルクスへの傾倒といい政治家への挑発といい、同時代の乱歩には、政治状況に対する明確な批判意識があったようである。生活が安定すると環境を変えたくなくなり、雑誌の仕事に就くと独善的な編輯をして周囲に迷惑をかけるという失敗を繰り返していた乱歩は、いよいよ苦境に追い込まれる。

一九一九年一月には鳥羽造船所時代に知り合った村山隆子と結婚しているし、それと前後して朝鮮から引き揚げてきた母と妹が三人書房の二階に同居している。一九二二年二月には長男・隆太郎も誕生している。だが、肝心の生活は一向に前途が立たず、支那蕎麦の屋台を借りて商売をはじめたりもしている。翌年の二月からは東京市社会局の吏員に採用され月給生活となるため、実際に屋台を引いたのはわずか一〇日ほどらしいが、商売としては儲けが多かつたらしい。

さらに、この頃の乱歩は同居人の井上勝喜とともに智的小説刊



図4

行会なるものを組織し、『グロテスク』【図4】という雑誌の発刊を企てている。「智的小説刊行会規約」と題されたチラシには、「(一) 事業／(A) 月刊雑誌『グロテスク』の発行。／毎月四六版百五十頁乃至二百

頁。謄写版。／(B) 会員の会合。雑誌上にて相談の上、時機を見て会合、晩餐会乃至茶話会を催して意見の交換をしたり、種々の智的遊戯を試みたりする。(例へば、探偵ゴツコ、探偵劇の催し等)／(C) 会員の作品中優秀なるものを、相当機関に(このあとの文面不詳)」とあり、中学生の頃『中央少年』で夢見ていたことを大人になって再びやろうとしていたことがわかる。この『グロテスク』に関しては、八二頁にも及ぶ見本雑誌を作成し、主意書とともに各方面に送ったり『読売新聞』の三行広告欄で会員を募ったりしている。『貼雑年譜』には「智的小説刊行会設立の理由」なるガリ版文書が添付されており、「我等は好奇的小説就中探偵小説を極愛するものの一団です。世間では探偵小説其他好奇的な小説をセンセイシヨナルと称して、一概に下品な劣等なものにしてつて居る様ですが、我々は左様な見解を持つてゐる人々こそ低能な生半可だと思ひます。／純文学が人情の機微を写し出すものであれば、探偵小説などは智識の機微を写し出すものです。一は人情の感じて未だ云ひ得ざる所を深く細く云ひ現はす所に妙があると同じ様に、一は人智の想像し得る限りにして未だ常人の思ひ及ばざるこの作品をご批判下さつたりして、我々の拳を助けていただきたいと思ひます」と記されている。この文

書に率直な思いが書かれていることは間違いないが、「低能な生半可」などといった表現で読者を見下す姿勢をみても、当時の乱歩がいかにバランス感覚を逸していたかがわかる。

一九二〇年一月、乱歩は父の斡旋で大阪時事新報記者の仕事に就く。三人書房を舞台とした東京での慌ただしい生活は終わりを告げ、一家は大阪で父の家に同居することになる。このとき与えられたのは「時事新報」の地方版編輯であり、こうした作業に慣れた乱歩にとってはかなり楽な仕事だったようである。『貼雑年譜』には、その内容が「集マツテ来ル記事ノ軽重ヲ考ヘ見出しツケテ、一頁分ノ大組ヲスレバヨイノデ、午前十時頃に出勤午後四時二ハ帰宅スルコトガ出来タ」と記されている。家族が一緒に暮らせるだけの安定した収入が得られ時間的な余裕もできたのだから、常人であれば本来の夢であった作家としての自立に向けて創作活動に勤しむところだろうが、自分の力で好きなように雑誌を編輯したいという熱病に憑りつかれた乱歩は、またしても東京からの誘い水に導かれて上京してしまう。

一九二一年四月、乱歩は庄司雅行の斡旋で日本工人倶楽部書記長となり、一家で上京する。大阪時事新報の月給六〇円が一〇〇円の月給になるという条件面での魅力もあったのだろうが、それと同時に大きかったのは、地方版の記事を機械的に処理するだけの記者業務に退屈していたということかもしれない。この年の夏に乱歩が印刷した「暑中御見舞」(『貼雑年譜』に添付)には、「二十八歳の夏を迎へ候、おれは偉いと思つたり、おれは馬鹿だと思つたり、一生の大事業を計画して見たり、三十になるやならずで死ぬかもしれぬ身をはかなんだりして幾年月を過ご候へ共、生れ

つきの性向から仕事に於ては割合に分相応の方向に相向ひ居候／暑中見舞を種に、平井太郎の存在を忘れまじとこの端書差出し申候」という意味深長な文言が記されているが、こうしたものいいの背後に、苦悶と矜持の混濁を見ることは容易い。

日本工人倶楽部書記長となった乱

歩は、工人倶楽部機関誌『工人』【**図5**】の編輯を中心に献身的な仕事をみせる。従来と同様、自身の署名記事として翻訳「科学的適材適所主義」（一九二二年五月）、「質問応



図5

答」（同年七月）、翻訳「トレード・ユニオンの職分」（同年一月）、論説「競争進化論」（一九二二年一月・未完）を掲載する。一九二一年八月には『工人』特別号「労働争議記録」を編輯し、「最近労働争議記録号」総論」を書く。乱歩の提案により表紙を差し替えて別冊として売り出された日本工人倶楽部編『最近労働争議記録』（日本工人倶楽部、一九二二年九月）は書店でも高い売れ行きを示す。特別号の巻頭に乱歩が書いた「労働争議号序」には、「七月は労働争議の月であつた。阪神を中心として全国に幾十の争議は頻発し、遂に軍隊の出動を見て尚ほ解決に至らぬ状態である。大正十年七月は日本労働運動史に一時代を画した。我々は工人の立場より冷静なる批判を下し、最良の態度を決定せねばならぬ。その批判の材料として本誌八月号の全頁を提供することにした。材料なるが故に凡て客観的記述である。出来るだけ記者の主観は避けられた。／先づ一般論として争議に対する政府、資本家、棒給生活者の態度の一端を示し、今回の争議の根本原因たる失業

の状態を述べ、争議に関する新記録を略記して各論に入り、川崎、三菱の争議顛末より小は人力車輓子の同盟運動に至るまで、地域に於ても北海道より台湾、上海に及ぶ三十有余の争議の大体を記述した」とあり、特別号に対する意気込みが伝わってくる。

また、この誌面を添付した『貼雑年譜』には、「大正十年八月労働争議ノ年デアツタ。コレニ対シ技師ノ組合デアル工人倶楽部モ何ラカノ意志表示ヲシナケレバナラナカツタ。ソノ資料トシテ全労働争議ノ鳥瞰図ノ如キモノヲ作ル意味デ、私ハ右ノ特別号ヲ編纂シタ。ソシテ巻頭ノ総論トイフヤウナモノヲ執筆シタノデアアルガ、ソノ全文ハ前記ノ通り別ノ袋ニ収メテアル。コ、ニハ序文ダケ掲ゲタ。コノ特別号ハ一般ニ売出シテモ需要ガアリサウニ思ツタノデア次頁ノヤウナ表紙ヲツケテ別ニ数千部印刷シ、書店ノ店頭ニ出シタトコロ、可ナリノ売行ヲ見タノデアアル」とあり、「労働争議ノ鳥瞰図」を示すという方法意識を明確にしている。ここで

の乱歩にかつてのような性急さ傲慢さはなく、あくまでも客観的な立場から争議の状況を記述しようとする姿勢が貫かれている。

こうした仕事を評価した庄司雅行は、自らが始めた郊北化学研究所の支配人として乱歩を招聘し、月給一五〇円という好待遇を与える。こうして工人倶楽部書記長を退いた乱歩は、雑誌『工人』の編輯と印刷のみを請負う契約をする。仕事が順調に回り始めたことで、書生を同居させて大学に通わせるほどになる。だが、庄司雅行に資金力がなかったため、乱歩はわずか四カ月で支配人の仕事を解任され、『工人』編輯についても自ら月給半減を申し出ることになる。一度は、妻子を大阪の父宅に預けて单身東京に残るといふ決意をするが、結局、妻が大病を患つたのを機に大阪

の親許に連れ戻されてしまう。すでに三十代を目前に控えていた乱歩にとって、それは屈辱的な日々だったに違いない。

それまでの乱歩だったなら、ここでまたすぐに新しい仕事に就いて捲土重来を図ったことだろうが、このときの乱歩はそうした安易な動きをせず、一九二二年七月から二月までの半年間を失職状態で過ごす。そして、遂に探偵小説作家としてデビューを果たすべく「二銭銅貨」と「一枚の切符」を書き上げる。ちょうどその頃、神戸市図書館において倒叙小説に関する講演をした馬場孤蝶に共鳴した乱歩は、原稿を孤蝶に送るが、多忙だったため目を通してもらったことすら叶わず、取り戻した原稿を博文館『新青年』の主幹・森下雨村のもとに送る。すると「二銭銅貨」を拝見して、すつかり感心させられました。「一枚の切符」も同様、一気に拝見して、大変い、作だと思ひました。正直なところ、新年号へ載せた二三の作などより遙にい、ものだと存じます」という賞讃の書簡が届き『新青年』掲載が決まる。乱歩は、まさに妻の大病のおかげでじっくりと机に向かって探偵小説を書く時間を手に入れ、極限まで追い込まれた状況のなかで、作家になるための跳躍を果たすことができたのである。

ここからの乱歩は、大橋鉄吉弁護士事務所の手伝い、大阪毎日新聞広告部員などの仕事をこなしながら森下雨村の期待に応えるための原稿執筆に勤しむようになる。「一枚の切符」(『新青年』一九二三年七月)「恐ろしき錯誤」(『新青年』一九二三年一月)を発表し、新人作家としての足場を固めていく。仕事においても、新聞社の広告部員だった時期に編輯者として蓄積してきたアイデアを駆使して周囲を唸らせるなど、すべてが好転しはじめる。

『貼雑年譜』にはその頃のことを「セメント会社ノ一頁聯合広告ヤ「紙上機械展覧会」ト銘ウツタ二頁聯合広告ナドハ前例ノナイ意匠デ、社長ノ注意ヲ惹イタホドデアツタ。ソレヲノ広告員ノ保存シテナイノハ残念デアアル。又アル時ハ夕刊一面下ノ三段ニ漫画広告トイフモノヲ初メ、私自身ツヅキモノ、漫画ヲ書イテ、ソノ一駒々々ニ各商店ノ広告ヲ入レテイタ方法ヲ発案シタコトモアル。ソレモ残ツテキナイノデアアル」と記されている。

だが、ここで乱歩はもうひとつの奇跡に恵まれる。それは一九二二年九月一日に起こった関東大震災を直接体験せずに済んだことである。もし彼がそのとき東京に留まり、安普請の借家に棲んでいたら、どれほど大変なことになっていたかは想像に難くない。乱歩はまさに妻の大病があったことで大阪に居を移し、その選択によって命拾いしたのである。

5 作家・江戸川乱歩の誕生―『探偵趣味』『大衆文芸』

大手出版社の商業誌に小説を掲載できた作家は、多くの場合、同人誌や格下の商業誌への寄稿を躊躇うようになる。原稿料をもらって作品を掲載することが作家の本分である以上、原稿料の安い雑誌に寄稿することは自作の商品価値を下げることにつながるからである。だが、乱歩は『新青年』でデビューしたあとも自前の雑誌を作り続けることを止めなかった。乱歩が春日野縁とともに立ち上げた「探偵趣味の会」はそうした実践のひとつである。

一九二五年一月、乱歩は初めて名古屋の小酒井不木と対面するとともに、上京して博文館の森下雨村や自身の作品を絶賛する書

簡を送ってくれた宇野浩二のもとを訪ねる。また、こうした行動を通して多くの探偵小説作家たちと出遭い、交流を深めていく。

「伊藤恭雄、井上爾郎、本田緒生、和氣律次郎、横溝正史、山下利三郎、顯考與一、小酒井不木、水谷準、井上豊市郎、西田政治、大野木繁太郎、春日野緑、村島歸之、松本五郎、甲賀三郎、江戸川乱歩（名簿上の表記「筆者注」、平野嶺夫）」を発起人とする「探偵趣味の会」は、こうした交流が実を結ぶかたちで一九二五年四月に発足する。

その活動内容を見ると、乱歩が中学生の頃から繰り返ししてきたことがそのまま実現されていることがわかる。たとえば、乱歩が書いた「発刊の言葉 探偵趣味の会の設立」（『新青年』一九二五年六月）には、「探偵小説を愛好する人々を始めいはゆる探偵味のある仕事に携はる人々——例へば法医学者、化学者とか、警察や法曹界の人々、民間探偵など——同じ趣味の人々が集まつて、お互いの研究を発表しあふことは非常に面白く且つ有益だと思ひます。この会は去四月創立以来既に本邦探偵小説作家翻訳家の殆んど全部を会員に網羅し既に四回の会合を開いてゐます。本会の事業は（一）犯罪及探偵に関する科学的研究（二）探偵小説の創作と翻訳と批評（三）探偵趣味講演会開催（四）探偵的活動写真の鑑賞（五）犯罪及探偵に関する各種施設の見学（六）会員の探偵作品などを各雑誌へ推薦紹介する（七）機関雑誌の発行等で、同行者はだれでも歓迎します。会費月五十銭（なるべく半年分三円前納を望む）会員には週刊『サンデーニュース』を機関とする本誌を贈ります」とあり、多種多様な職業の人々が集つて探偵小説に關連する事業を包括的に行おうとしていたことがわかる。雑誌の編輯発行、会員の創作支援などはもちろんだが、会合の目的

は単なる交流や親睦ではなく、「研究」と「批評」に置かれていく。つまり、乱歩が探偵趣味の会に期待したのは、新たな作家を養成して優れた作品を書かせると同時に、探偵小説を世に広めたいと考える出版社や愛好する読者を育て、優れた文芸ジャンルとしての可能性を追求することだったのである。



図6

「探偵趣味の会」が発刊した『探偵趣味』[図6]は編輯者が毎号交代するという変則的なスタイルを取っており、創刊号は乱歩が担当している。後記「編輯当番より」には、「どうも探偵物は益々盛んになる様だ。今月の

「婦人公論」は文壇知名の士に探偵物をか、せてある。「新青年」の来る新年号にはやつぱり文壇人の探偵物を集める相だ。誰か、希望してゐた廣津和郎氏も書いた相だ。新聞の文芸欄にも大部探偵小説のことが散見する。「読売」紙上の国枝史郎氏の「日本探偵小説界寸評」など、なか／＼盛んなものだった。その後も「読売」では一記者といふ人の涙香時代の回顧、「蠅の肢」の作者の紹介など、色々書く。／＼さて、少し私事に亘るが、余白を借りて一言御挨拶を申述べる。最近左の方々の御論は、夫々有難く拝誦しました。／＼平林初之輔「新青年」の「心理試験」を読む、春日能為氏同上の「乱歩の創作集」、井汲清次氏「都新聞」の「探偵小説の狭き門」／＼それから、国枝史郎氏に、「読売」の愚論に対するお答へ拝見しました。いづれお会ひする機会もあること、存じます。万事はその節（乱歩）とあり、多くの雑誌・新聞が探偵小説を取り上げるようになっていくこと、既成作家のなかにもそれに挑戦

する書き手たちが増えていることが興奮気味に語られている。

当時の乱歩は、職業作家となつて一年余りということ、様々な雑誌からの執筆依頼に片端から応じていたと思われる。一九二五年度に発表された小説は実に一六編を数えている。それまでに蓄積していた構想やアイデアが用いられているとはいへ、「D坂の殺人事件」「心理試験」「屋根裏の散歩者」「人間椅子」などの代表作が同じ年に発表されているというのは尋常なことではない。逆にいえば、当時の乱歩は、自作の執筆に膨大な時間と労力を費やさなければならぬ状況にあった。にもかかわらず、彼は苦勞を厭わず探偵趣味の会の活動に奔走した。まるで新しい雑誌を作ることが創作の原動力であるかのように、忙しくなればなるほど『探偵趣味』の編輯にのめり込んでいったのである。

だが、乱歩の雑誌偏愛はそれだけに留まらなかつた。『探偵趣味』を通じて同好の士を集めた乱歩は、捕物帳や時代小説の領域で活躍していた既成の大衆文学作家たちとも連合して「二十一日会」を結成し、雑誌『大衆文芸』の創刊に携わるのである。『貼雑年譜』に添付された「『大衆文芸』創刊に際して」（一九二五年一〇月配布）には、「我々同好者の懇親と研究の会合であつた『二十一日会』及びそれと文信歓談の間柄であつた人達との間に、計らずも機運が熟し、茲に月刊雑誌『大衆文芸』を創刊する事となりました。／『大衆文芸』は仮に執筆同人を設けますが、決して我執党派の意義は無く、大きく外に向つて我々の信念を完成したいと思ひます。されば純理芸術壇と相俟つて車の両輪の如く、我々の目賭する大衆文藝を達成せしめたいといふのが真意であります」とあり、いわゆる純文学系の作家たちが集う既成の文壇に對

抗して大衆文学の勃興を図り、「車の両輪」として機能させていくこうとしていたことがわかる。創刊時の同人には「長谷川伸、本山荻舟、平山蘆江、白井喬二、矢田挿雲、土師清二、國枝史郎、小酒井不木、直木三十三、江戸川亂歩、正木不如丘、池内祥三」などがおり、乱歩の存在はむしろ異端に見えるが、本人には、探偵小説と捕物小説が広い意味での大衆小説として機能していくことで既成の文壇に對抗できるという算段があつたのであろう。

『探偵趣味』とは違い編輯の中心的な役割を果たしたわけではないため、どちらかといえば探偵小説作家が『大衆文芸』の一翼に加わつて純文学の文壇に對抗するという意味合いが強かつたと思われるが、こうした雑誌に関わることで探偵小説の可能性を語り合う仲間を得て創作の孤独から逃れることができたのは事実である。『探偵趣味』と『大衆文芸』、それぞれに名を連ねた乱歩が盟友である横溝正史とともに上京したのが翌一月であることを考えると、それらの雑誌は東京における自身の立場や理念を明確にしておくための布石でもあつたはずである。

6 おわりに

以上、中学の同人雑誌時代から職業作家として再上京するまでの期間を射程に、『貼雑年譜』の添付資料や備忘録を通して乱歩が編輯に関わつた雑誌を追つてきた。乱歩の前半生が常に新たな雑誌企画とともにあり、探偵小説の可能性を信じる多くの同士に囲まれていたことが明らかになった。大学時代には政治や経済に傾倒し、労働争議などを巡つて先鋭的な議論を展開することも

あつたし、その後、記者として現場の取材に関わつた経験もあるが、特定のイデオロギーに基づいて行動するのではなく、自由で開かれた言論と創作の場を提供することが目的とされてきたことも明らかになつた。また、乱歩は記録魔であると同時に編輯魔でもあり、雑誌本体の装幀やデザインはもちろん誌面の隅々に至るまで趣味趣向を行き渡らせ、まさに自身の幻影をかたちにすることに拘泥した作家だつたということも確認できた。乱歩の小説には自分の趣味趣向に耽溺して破滅していく主人公が少なからずいるが、彼にとつての雑誌は、まさに自分のやりたいことをそのまま形にすることができる智的遊戯の場だつた。

だが、それ以上に重要なのは、結果として雑誌を編輯する技術と能力が彼の生活を支え続けたということである。大学卒業後、東京と大阪を行き来しながら数々の職業を転々とした乱歩がどうか破綻せず暮らしていったのは、常に彼に仕事を斡旋してくれる知己がいたからであり、編輯能力に対する信頼があつたからである。若き日に活字との密約を交わした乱歩は、活字を通して他者と関わり、活字を通して世界をまなざすことで生計を立て、やがて職業作家となることができた稀有な存在だといえるだろう。

注

- (1) 『寶石』は岩谷書店が一九四六年三月に発行した探偵小説雑誌だが、同社の経営不振により一九五二年九月から城昌幸を社長とする寶石社が継承していた。

- (2) 『貼雑年譜』は、戦時中に文筆活動ができなくなつた乱歩が、手許にある諸々の資料や記事で自らの半生を検証しようとして

製作したスクラップブックである。全九冊のうち第一巻と第二巻は二〇〇一年に東京創元社が『江戸川乱歩貼雑年譜 完全復刻版二分冊』(二〇〇〇セット限定)として刊行されているが、第三巻以降は現在までオリジナル以外に存在していない。

- (3) 乱歩は『貼雑年譜』に添付した「経済学への関心」という備忘記のなかで、「ダーウキンノ進化論ニ感動シクロボトキンノ相互扶助論ヲ愛読シ、マルサスノ「人口論」ニ関心ヲ持つ。私ノ時代ハマルクス流行ヨリハ少シ早カッタノデ、最も影響ヲ受ケタ本ハ何カト云ヘバ結局ダーウキンデアツタ。ツマリ育チトシテ自由主義者タツタワケデアル」と記している。

- (4) 乱歩は「競争論」のテーマで大学の卒業論文を書き、その内容を踏まえて『工人』(一九二二年一月)に同タイトルの論説を掲載している。

- (5) 『日和』編輯時代の乱歩については、浜田雄介が「江戸川乱歩と進化論」(石川巧・落合教幸・金子明雄、川崎賢子編『江戸川乱歩新世紀 越境する探偵小説』ひつじ書房、二〇一九年二月)のなかで詳述している。

- (6) 『東京パック』については高島真「追跡『東京パック』 下田憲一郎と風刺漫画の時代」(無明舎出版、二〇〇一年一月)を参照いただきたい。

【付記】

本稿収録の図版は立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター管理資料である。本稿は科学研究費基盤研究(B)「近代日本探偵小説研究の基盤整備…資料の調査・保存・公開とその活用」(代表・浜田雄介、研究課題/領域番号 19H01232)に拠る研究成果の一部である。

(いしかわ たくみ 本学文学部教授)